

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本漢字音史における位相的研究
Auther(s)	佐々木, 勇
Citation	國文學 : 解釈と教材の研究 , 48 (4) : 62 - 66
Issue Date	2003-03-10
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00030986
Right	
Relation	



日本漢字音史における位相的研究

佐々木 勇

(ささき・いさむ)

一、日本漢字音史の研究

日本漢字音史の研究は、日本語に大きな位置を占める漢字・漢語音の歴史的研究である。

現代の日本語の過半数は、漢語であるのに、一般の人々のこの分野への関心は低いように思われ、研究者も多いとは言えない。

なぜであろう。

おそらく、漢字の音はわかりきっているし、知らないものがあれば辞書を引けばよいと、多くの人が考えているからではないだろうか。

しかし、現代の漢和辞典は、日本の古文獻における漢字・漢語の音・意味を知るためには、ほとんど役に立たない。現行の漢和辞典は、中国の漢文・漢詩から用例を取り、その中国語音・意味を記述している。ところが、漢

字・漢語は、日本に取り入れられてから、音・意味が変化している。

したがって、日本での漢字・漢語の音・意味を調査・研究しない限り、日本の古文獻を読むための「漢語辞典」はできあがらない。

日本漢語の意味変化の研究は、盛んになってきた。同様に、日本漢字音の歴史も研究されなければならない。

その日本漢字音史の研究において、今後、重要な部分を占めるであろう位相的研究について、述べたい。

二、古代の漢字音

過去の言語音は聞くことができないから、残された文獻と現代語音とから推測するしかない。

よって、かつての日本漢字音の発音について考えるに

は、現代における外国語音の実態を参照しなければならぬ。
い。

1. 外国語を学習した者の外国語音

いま、現代日本語に大量に摂取されている英語の発音をみてみよう。

現代日本にも、日本語を母語としながら、英語を自由に使用する人々がいる。その発音は、人によって様々だが、英語母語話者と変わらない人もいる。

また、英語の音・意味を詳しく勉強している人々は、多い。

学習の過程では、辞書を参照し、英文に発音記号・アクセントを書き込むことをする。

従来の日本漢字音研究の主資料は、このような学習の跡をとどめた文献であった。具体的には、字音直読資料と辞書・音義とである。

字音直読資料とは、漢文の本文を、音で通読した時の音を、反切・仮名・声点・その他の符号で記したものである。また、辞書・音義は、当該字の音と意味とを反切・漢字・仮名などで記したものであり、英英辞典・英和辞典に当たる。

字音直読資料の中には、日本語には存しなかった有気音・無気音の区別、複雑な声調の区別等を行なっているものがある。また、比較的古い辞書・音義では、中国で考案

された反切・同音字注によって音が示されている。

字音直読資料・辞書・音義も一様ではない。しかし、これらの資料の大部分は、中国語原音に近い音を示そうと意識していたものであろう。

2. 外国語を学習しなかった者の「外国語音」

右のような音が、当時の日本で行なわれた漢字音のすべてであったはずはない。

再度、現代日本の英語を見てみよう。

英語を習得していない日本語話者は、英語で会話することはできない。しかし、現代日本語に不可欠なテレビ・ビデオ・バス・スパゲッティなどの外来語（英単語）を用いざるをえない。その人々が日本語文脈中に用いる英単語は、日本語化された発音となる（アクセントも日本語の体系に組み込まれる）。

同じように、かつて中国語を学習する機会が無く、聞いた漢字音をまねして発音する人々が大勢いたはずである。その人々は、聞き慣れない漢字音は、手持ちの音で代替して発音したことが予想される。

一例として、合拗音「*kwa kw*・*gwa gw*」を取り上げる。

この音は、概説書（注1）には、江戸時代の後期に直音化する（*ka*・*ga*となる）とされている。

ところが、院政期の『仮名書き往生要集』一一八一年写

本に、すでに、「いんか(因果)」「かんき(歡喜)」等の例が指摘されている。その後も、古文書に有名な「ケンチカ
ンネン(建治元年)」「阿豆河庄上村百姓等言上状」の例をはじめ多くの類例を指摘できる(注2)。

これらの直音表記例は、一旦定着した合拗音が直音化した例としては、時期が早すぎる。

このような例の出現理由は、次のように考えるべきであろう。

最初からして学習すべき音であつたので、あやまりがぼつぼつ認められる。したがってそういうあやまりをもって、音韻の混同がはじまったなどと考えるべきではなく、たまたまあやまったものと認めるべきであろう。それは知識の不足なのである。

(馬淵和夫「国語音韻論」一九七一年、笠間書院)二〇頁

そのような位相の漢字音を含め、各時代の漢字音の実態記述がまだまだ不十分である。

その資料として、仮名文・仮名文書中の仮名書き漢語を収集することが考えられる。古文書の翻刻・データベースの公開が進んでおり、環境は整備されてきた。また、新出の資料群として、角筆文献の発見が続いている。

これらを利用した研究が行なわれるならば、古文書・古文獻の読解がより正確になるであろう。日本史・民俗学等の諸研究と深く関わる重要な仕事である。

「体系に関わる言語変化は基底社会方言から生じる」、と言われている(注3)。

従来の日本漢字音史の研究で判明しているのは、辞書・音義・字音直読資料を対象資料とした、上層の字音体系であった。

漢字音の場合、基底社会方言においては、上層社会方言での音がいったん定着することなく、ただちに、後の変化形として見られる音で使用されていた可能性もある。右の例で言えば、「グワンネン」を経ず、当初から「ガンネン」と発音されていた可能性が存する。

漢字音を学習する機会がなかった人々の漢字音は、どのようなものであったのかを、今後、調査しなければならぬ。

3. 場による音の使い分け

現代日本語における英語の発音は、一通りではない。英語を文章として話すときの発音と、英単語を日本語文脈の中で用いるときの発音とは、異なることが普通である。

英語文脈で coffee と言うときと、日本語圏の喫茶店で「コーヒー」を注文するときの発音は、同一人でも違っている。英語を上手に話す人も、日本語文脈中で、日本語として、コーヒーなどの英単語を発音するときは、英語を習得していない人の発音と変わるところがない。英語として発音する必要がないからである。

文章に書くときにも、英語文で書けば、英語のネイティブスピーカーの発音で読まれることが期待され、日本語の中にカタカナで書き込めば、日本語の音韻体系で再現されてかまわないと考えているであろう。

右のクワ・グワの音も、江戸時代に教養ある人々の間で、場面によって使い分けられていたことが明らかにされている(注4)。

時代を遡って、鎌倉時代においても、訓読資料『大慈恩寺三蔵法師伝』の一二三年訓点には、次のような直音表記例がある(注5)。

宏(宏遠・四197) 宏(八宏・六203)
卦(八卦・九88) 粹(粹海・六216)

この訓点を加点したのは、興福寺の僧弁淵である。右の例以外の箇所では、「クワ」と加点している。よって、合拗音を習得していないわけではない。

字音直読資料と異なり、日本語として訓読した訓読資料の加点では、規範意識がゆるむことがあったのではないかと想像される。この文献の漢音声調も、当時の字音直読資料に比べて、日本語化されたものであることがわかつている(注6)。

このことを確認するには、さまざまな種類の文献を今に残した一個人を調査してみる必要がある。筆者は、かつて、そのような個人として親鸞(一一七三—一二六二)を

選び、舌内入声音の実現に、必要に応じた閉鎖音の実現・非実現があつたことを説いた(注7)。

親鸞は、中国韻書の反切を引用する文献を書く一方で、仮名さえ読めれば読み上げ可能な書を多く残している。弟子達と話すときと、「ギナカノ・ヒト、ノ・文字ノ・コ、ロモシラス・アサマシキ・愚癡・キワマリナキ」(親鸞『一念多念文意』末文)人々と話すときとは、漢語の発音が異なっていたことは、想像に難くない。

このように、漢字音は、一個人においても、多様に実現されていたと考えられる。

三、今後の課題——位相的研究の必要性

日本の古文獻・古文書に出てくる漢字・漢語の音・意味を知るための辞書をつくらうとすると、右に述べたような、各時代の各場面における位相的研究が必要である。

しかし、すべて今後の課題である。

本来、外国語音(中国語音)であつた「音」は、現在の日本語にきわめて大きな位置を占める。そのため、漢字音は、他の外来語音と区別される。古代の漢字音から、いかにして現代の漢字音に至ったのか。それを明らかにすれば、未来の音変化を予測できる。したがって、現代の外来語の音・表記への対応も、安定したものとなるであろう。

日本漢字音史の研究は、未開拓の部分が多い。
この分野に取り組む多くの研究者が現れることを望んでいる。

注1 築島裕『国語学』（一九六四年、東京大学出版会）、沖森卓也編『日本語史』（一九八九年、桜楓社）、など。

注2 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」（『広島大学文学部紀要』特輯号3、一九七一年三月）、同『角筆文献の国語学的研究 研究篇』（一九八七年、汲古書院）七一・七二〇頁。

注3 小松英雄「日本語はなぜ変化するか」（一九九九年、笠間書院）一七三頁。

注4 松村明『江戸語東京語の研究』（一九五七年、東京堂）、神戸和昭「化政期江戸語に於ける合拗音クワ（グ

ワ）」（『国語学研究』三〇、一九九〇年十二月）、同氏の一連の論文。

注5 佐々木勇「『大慈恩寺三藏法師伝』鎌倉初期点における漢音形の日本語化―院政期点および『蒙求』字音点との比較を通して見る―」（『新大國語』第二九号、二〇〇三年三月発行予定）。

注6 佐々木勇「日本漢音声調の必要性の低下について―院政期と鎌倉期の『大慈恩寺三藏法師伝』訓読資料を比較して―」（『国語国文』第七一卷第二号、二〇〇二年二月）、参照。

注7 佐々木勇「鎌倉時代における舌内入声音の諸相」（『鎌倉時代語研究』第二三輯、二〇〇〇年一〇月）。

――広島大学助教授――